

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 12 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



小豆島の携帯電話屋さん、通称ドコモショップで見つけた。今週も行ったので読んでみた。先週も存在に気づいていたが、テレビが珍しく見入っていた。今週はいかにも番組がつまらなそうだったから、この本に直行して前書きから読み始めた。待ち時間は 20 分程度だったから 30P 程度しか読めなかったような気がするが、充分面白かった。・・はじめに・・は何故自分がこんな憂き目にあっているかを書き始めていて、経歴は東大法学部卒だからそんなでもないのだろうけど、イザ社会に出てみると意外と仕事は勉強程簡単ではなくて、『あれっ、生きて行くのってこんなに複雑系なのっ』て。

いや、『そもそも、生きて行くって何なの』って。では何故それまで疑いもなくやって来れたのか、振り返ってみれば『答えが簡単に出る事ばかりやって来て、答えの無い事って、こんなにも多いの？』って知らなかったみたい。根本的に自分って、なあに、と人は必ず一度は通りかかるテーマに差し掛かった。大概の人は、答えを得ずにそのままそこに留まって、とりあえず目先のしなければいけない事を優先して、忘却しようとしていく。でも、この著者は答えを、どうしてもつかめないと先に進めなくなってしまう、大学を卒業するまでのように。それで、どういう訳か、ここがセンスの無さだけど、西洋の哲人の書物を読み漁って行く。西洋人の発想でこの手の問題を捉えようとする、気が狂うしかない。何故かは簡単、西洋人は自分を規定する時、自分以外の人間を引き合いに出して来るから、自分自身の中から湧き出る疑問は一生解決できそうにない。

こうして勝手なことを書いている私自身、一人として、一冊として西洋の哲学書を読んだことなど無い。ただ、カルロス・カスタネダが書いた、『呪術師と私ードン・ファンの教え』と言う、メキシコのヤキンディアンの取材物語、1974 年に二見書房から出版された書籍は、大変興味を引かれて第 3 部まで熱心に読んだ。後で知ったが第 7 部くらいまで出版が続いていたらしい。

で、彼、画像の書籍著者は、最後にニーチェに行き着き、この御仁こそスーパースターだと思ったが、肝心の本人が最後は 1 年ほど布団の中に籠り切りそのまま生涯を終えたと知り、『だめだこれは』『自分は布団から抜け出したいのに、そのままなんてとんでもない』と思い、次に手を出したのが東洋哲学だったらしい。本文に入っていくのだが、最初にブッダが現れる。私は、シッダルタは中学の時に手塚治虫の漫画で読んだと思っていたが、どうも高校生だったらしい。調べると 1972 年となっていた。確かここにイラストを掲載した。

表紙にも出ているが、だから東洋哲学のブッダ以外の 6 人の哲人の話しを書いているらしい。よく見ると一人知らない人がいる。『龍樹』って誰？まあ、誰でも良いし、誰が誰でも構わない。30p しか読んでいないので、続きを読んでみたくて早速注文をした。明後日届く予定らしい。でも当てにならないから、高槻に届くようにした。この 2 年 3 年は本を手放していた。

だが、今読んでいる宮本常一の『忘れられた日本人』で、また本の面白さを思い出し、先日も藤井平司『甦れ！天然農法』という本を、もう一度読んでみたくて注文しておいた。これは多分家の何処かを探せばあるのだが面倒で注文すると、何と ¥6,874 もした。もう一冊買おうとすると 1 万円を超えるみたいだ。大阪人の著者で、有機農法を神棚に奉る人たちを、ク〇〇ソに言っていて、大変面白かった記憶があり、確かこの人が、ア行からナ行までのそれぞれの行の特質を説明していて『なるほど』と納得させられた。

最近、毎朝降圧剤と、就寝前の鼻炎の薬と薬漬けになっている。薬は元々好きな方だが、いろんなところに副作用も効果も出ていて、但し同時に服用を始めたので、どちらの薬の作用か分からないのが難点である。で、話しが変わった訳ではなく、今日はドコモショップで、裸眼どころかサングラスをかけたまま先の本が読めた。そもそも本を手放したのは、活字が見づらくなって来て疲れてしまうようになったからだ。そういえば最近読んでいても疲れなくなっている。それなら、読みたいと思う本は相変わらずだし、YouTube も見るべきものが見当たらなくなっているし、ちょうど良いのかも知れない。

もう一度、内容に戻ると、だから『じぶんとか、ないから』と言っている。無いのは自分だけではない、こころも無い。すべて無いけど、すべてあるところがある。これは先月書いた。それは知恵を題材に書いた。そして、それを今月の経営会議で図を描いて説明すると、息子の吉田麻衣が『分かるような気がする』と言った。要は自分のいる場所が知恵の場所だと説明し、自分と言う枠線が強いと、その周りにある知恵の場所を感じられないのだと説明した。

この本を読めば、もっと面白おかしく書いているが、ただそれだけのことだ。70 を超えたオヤジが言っている事だから、嘘はない。ただ、その知恵の場所にも濃淡がありそうに思う。そもそも枠線っていうのは無い。熱いお湯と冷たい水が、浴槽で共存しているだけ。そこに熱交流するスポットが濃淡のように干渉し合っている。だから私たちがいつでもその気になれば、その『知の場所』に触れる事が出来る。ヤヒ族のイシの少年期を描いた書物には、男は13歳になると自ら、自らの『力の場所』を持たねばならない。其処に行きさえすれば自分に原初のエネルギーが宿る場所。慣れるとその場所を想うだけで、エネルギーが満ちて来るようになり、自らの生涯を狩る戦士として成長をしていく。多分、この間書き続けている場所について、すべて同じ場所、すなわち『静寂の知性』なる領域に私たちは生息している。生息しているし、此処で生まれて、他界して此処に戻る。『You are what you eat』せつかく正しくアプローチしていたのに、自信が持てなかったのか、気の毒に会社を売る羽目になった。私たちの身体は胡瓜で出来ている。茄子かも、ピーマンかも。ただ、ホンの数ヶ月ですべて入れ替っている。

米国は以前に書いたように kissinger が周と毛に、ひとつの中国として認知する約束して来ている。米国の主産業は兵器製造である。需要が無ければ売れない。日本と台湾に武器を売る為なら、其処に武力衝突を演出する。習も『だから・・・』と軍を増強し自らの地盤を固めやすい状況として利用する。同じ漢民族同士、仲良くすれば良いだけ。平和裏に解決とは、この事を言うしその様になる。いつの時代も、どんなところにも、自らの Community を売る人間は出て来る。弱みを握られるか洗脳されるか、いずれにしても親を選んで生まれてきたことを思い出せないでいるだけ。女性というのは面白い存在だ。男性の持つ陰湿さを『違うでしょ』と言える明るさがある。生物学的には女性が男性を必要とした事になっている。もう少し明るい反応が出来ないと女性に必要とされない男性になってしまいそうだよね。俺はモテル男がいいなあ。

有限会社アルファー 吉田清一郎